

加賀藩の蔵宿 (-)

——越中石動町の場合——

水上 一久

はしがき

はしがき

- 一 石動町制と蔵宿
 - 二 蔵宿の設置と統制
 - 三 蔵宿数、その消長
 - 四 蔵下村
 - 五 蔵宿の給人数
 - 六 蔵敷米
 - 七 蔵替の問題
 - 八 農村への貸附(以上本号)
 - 九 引米と払米
 - 一〇 蔵縮と蔵解
 - 一一 馬借との関係
 - 一二 蔵所新立問題
 - 一三 問道抜荷問題
 - 一四 寛政度における宿方相続仕法
- 結び

ここに加賀藩の蔵宿というのは、藩の給人に対しその知行米を預り、その収納及び払出を給人に代って取りおこなうを業務とした倉庫業兼金融業者の謂である。且つ彼等の、蔵米を担保として藩士への金融をはかり、藩士財政に対する潤滑油の作用をなした点において、江戸の札差・大阪の掛屋などと類似の点が指摘せられている。¹⁾

なるほどその業務・機構の上から、部分的には札差・掛屋に類似の点も多いが、しさいにはやはり加賀藩独自の体制に則して考うべき点が多いようで、むしろ結論的には、加賀藩の蔵宿は、規模の大いさにおいても比較にならぬ点はもとより、藩士金融面における機能においてもそれほど過大評価すべきでなく、むしろ藩の知行制度の末端機構として、藩の収納組織のなかで可なり嚴重に統制され、その枠内での營業を

余儀なくされたから、結局藩財政の基本体制とともに消長せざるを得なかったのではないかとおもわれる。こうした点については、従来あまり見るべき文献もないのであるから、一応具体的に加賀藩の蔵宿制度の種々相を明らかにゆかねばならぬのではないかと考えられる。

近世に暗い筆者がこうした問題を取扱わうとするのは、一に過般富山県石動町元蔵宿紅屋平兵衛家の跡たる千葉啓三氏の所蔵文書閲覧の機会が与えられたからである。したがって、一般的知識に欠くところが多く、ことに、藩の知行制度・金融制度など本稿の背景になるような問題についてなお考究しなければならぬし、且つ右の調査もいまだ未完であるのであるが、それにも拘らず、こうした形で判明せる部分についてだけでも提示しようとするのは、それが敢えて無意味ではなからうとおもうことと、且つそれによって大方の叱正を仰ぐ機縁にもなろうとおもうからである。

なお、後にも述ぶごとく、加賀藩の蔵宿は藩内に少くとも三十数カ所の町・在に散在していたのであるから、一石動町の例をもって、その全般を律することができないという危険もある。しかし、その蔵宿制度は全藩同一の規制にもとずいて運営されていたのであるから、その組織機構の一端は石動町のみでも差当って充分であるし、且つ石動はその位置・機能において加賀藩蔵所の代表的なものとして見做してよいであろう。ただ、石動町の場合、北陸街道に位置する宿駅として

の一面があり、蔵宿はまたそこでの家柄町人として、あるいは町役人として、同時に町政そのものに携ったのであるから、宿駅制度の面から見た石動町と、その宿場疲弊の中に立つ蔵宿の消長とは、おのづから相連関する問題として考察を必要とする。恐らく、そうした点についても続稿で触れうるものと考えている。

一 石動町制と蔵宿

石動町は富山県西砺波郡の西北部、加越国境に位し、人口およそ一万、北陸本線の一駅として現在さしたる特色もない平凡な町といえる。しかし、藩政時代には少からず重要な町であったことは、その町奉行を置かれ、郡方と別個の町支配となされていたことでも知れる（藩政時代の称呼は今石動である）。今石動町奉行は多く人持組ないし番頭格から任じ、配下に今石動与力五人をもっていた。この与力は各百石位の知行で、町奉行が遷替なるに對し世襲的に常任であった（時に与力加人が金沢から任ぜられた）。町奉行役所は奉行役宅で、与力が当番制で交替勤務し、なお足輕若干を所屬せしめていた。但し、奉行は郡奉行がそうであったごとく金沢に常住していたようである。一方、町民たる町役人は町年寄・肝煎・横目肝煎の三役及び算用聞・走り以下があり、町会所に結めて町政を執った。これも交替勤務であったが、総体的には月一・二回の寄合で町政を合議し、自治に當っていた。また各町には組合頭があ

り、十人組制が布かれていたこと金沢町制と同じである。⁽²⁾

元禄三年の調べで戸数は一・一六二軒（内一五軒寺社、六軒山伏⁽³⁾）で、天保九年閏四月の調べでは、町数二六⁽⁴⁾（本町⁽⁵⁾）、戸数一・〇七五戸、人口五・三四七人であった。同町は町制であるから地子米三五〇石六斗四升三合を納め、高は二四八石六斗三升八合（免六ツ七步）、物成百石に付一四〇目宛を上納し、また小物成銀二貫四三一匁五分三厘の定⁽⁶⁾（年定⁽⁷⁾）であった。一方、宿駅として御定転馬五十九疋・問屋一軒があり、埴生村をその加宿としてもち、月の内十一日より十三日と、廿一日より廿三日の計六日間、夫馬を出さしめていた。⁽⁷⁾

しかし、藩政時代、この町が占めていた重要な特色は経済上のそれで、五郎丸・八講布等のさらし木綿布の集散地として、多少の産業的意味もあったが、むしろ豊饒な砺波平野を背景とする米の集散地、いわゆる米どころとして重要であった。この点について、明和四年十二月今石動町肝煎平野屋孫兵衛外一人の願書付⁽⁸⁾にも、「尤往古々今石動町米方取扱重之家業ニ仕、莫太の諸役御定之通相動来申候所」とあり、宝暦五年四月十七日今石動蔵宿六軒よりの願書付⁽⁹⁾にも、

別而今石動之義者、往昔々河北郡牽売馬罷越、米方商売仕来、所之潤色ニ罷成申儀ニ御座候、尤私共納蔵修理等も時々相加念ヲ入申故、米直段も宜御座候ニ付、第一御給人様方御払米直段も宜、乍恐御為ニも宜義与奉存候、と見ゆるごとくであった。

もちろん藩士知行制度の上から、ふつう百石以上では加能越に知行地が組合せ給付であったから、給人として関係する蔵宿はひとり越中に限らなかつたが、金沢での納米は蔵宿十三軒に七万五・六千石（藩庫たる本堂形・新堂形入は数万石で、合せて大体年額十数万石）に過ぎなかつたから、城下金沢の用米の供給地として、ならびに米場建米としての越中米の占める地位は決して小さいものではなかつた（大正年間に至るまで、金沢・高岡の両米穀取引所が砺波郡の帰属について激争したことを思い合すべきである）。而してその給人知行米の収納・搬出はこの町在住の約六軒の蔵宿を通じてなされたのであり、蔵宿は実にその動脈的機能を果していたのであったが、一方給人米の地方流通圏から領域経済圏への吸収過程において、もとも底の浅い小城下町・宿立としての小流通圏の中心であつた石動は、漸次疲弊の一途を辿ることとなるのである。なお、この外石動町民の消費のための批屋⁽¹⁰⁾（米小売商）への供給米もあつたのであり、また右願書付によれば、石動における八講布等の綿布集散も、これら同町における米商いの利潤を廻すことによって成立していたといわれている。⁽¹¹⁾

二 蔵宿の設置と統制

加賀藩に蔵宿が制度化されたのは、大体承応頃からと考えられるが、それは給人の知行所現地支配からの切斷をめぐる諸施策にともなう必然の措置であつたらう。その史料として

最初のものは、承応三年（十一月カ）廿六日菊池大学・伊藤内膳の蔵宿身元ならびに十人連帶責任に関する達である。且つ「戸出史料」には、戸出蔵宿の創始を承応三年としており、事実その頃から設けられたものと考えられる。ついで寛文二年七月十日の「御家中諸給人知行米預置候蔵本御定之覚」⁽¹⁶⁾で定められた蔵宿所在箇所はつぎの三十六カ所である。

金沢町中 小松町 鶴来町（以上加賀三カ所） 今石動町 氷見町
 城ヶ端町 高岡町 福光村 戸出村 東岩瀬 水橋 滑川 赤川
 横山 泊 魚津町（以上越中二三カ所） 高松町 七尾町 剣
 地村 道下村 輪島町 曾々木村 飯田村 宇出津村 鶴川村
 中居村 富木村 子浦村 飯山 今浜 神代川尻 堀松村 大島
 村 羽喰村 熊木村 野崎（以上能登二〇カ所）

けだし、この蔵宿定置以前には、給人下代を知行所に遣わす等のことが禁ぜられており、改作法の主旨からも給人と知行所百姓分離は必然であったのである。蔵宿設置以後も、收納に当り、給人から收納監督のための立合人を送ることがなお続いていたが、享保十一年八月改作法に反するとてこれを禁じている。⁽¹⁸⁾翌寛文三年八月には、御定蔵所のほか、給人知行米を預けてはならぬとの規定を改め、奉行人指図でもって相對蔵宿を立てることを許している。⁽¹⁹⁾しかし蔵所新立が無制限で許されたわけではなく、寛文の御定蔵所は大体その後固定したようである。けだし蔵宿の設備は、時期的にもそれと前後する承応・明暦間の十村の收納制度への関与、給人知行

割と免上等一連の措置との関連のもとに考えらるべきで、地方知行制の実質的な排除につれて必然であった。そしてその根柢には、当時における給人地払米による地方流通圏の一応の固定と細分化があり、そこにおける給人米の保管、販売業の代行的機能をより藩側に制度化したものとえよう。そしてその後の地払米禁止によって、漸次給人米の全藩的流通圏への吸収が目ざされていた。

これらの蔵所一カ所には、おおむね数軒の蔵宿があったわけ、石動では中期には六軒、その外判明するものでは高岡では六軒、戸出では三軒、金沢では前述のとおり十三軒の蔵宿があったのである。⁽²⁰⁾これらは一種の株仲間を組織し、すなわち自由営業を許されなかった。この点江戸の札差と同様であり、蔵宿株は売買譲渡によって移譲したが、譲受をうけるものは現蔵宿の分家とか、ないし資産ある家柄町人に限られておったようである。⁽²¹⁾

蔵宿に対する藩の監督は極めて厳しく、いわゆる儲かなる者・分限者⁽²²⁾にこれを命ずるとともに、その請人制はもともと嚴重で、毎年六月收納前、請人連名の請合帳、町内十人組の請合帳を提出せしめて、蔵宿に衰運の兆あるときは請人・町内をしてその責に任せしめた。⁽²³⁾一方蔵宿は年々給人の知行出御所附の通知を受け、且つ給人中知行所引免引高あれば免附紙面を村方より受取おき、これらに納得書を提出するとともに、給人には預り状を発する。その他、十日々々の納米・払

米届、毎月末の蔵米有高届、毎年の蔵米有高届の外、本勘帳等の決算書を支配奉行に提出しなければならず、就中、給人の判印鑑照合のための判印鑑帳は蔵宿にとって最重要の書類であったが、これも支配奉行所の認可を得しめられた。

かく蔵宿は直接には支配奉行(在方ならば町奉行)の監督を受けるが、蔵宿仲間中より蔵宿惣肝煎一人を出して、支配奉行所との上申下達の衝に当たるとともに、仲間の取締・書類作製・収納米納入期に際しての見廻に至るまで万端の責に任じた(その役料は延享二年七月で蔵宿預り米百石に付七升であつた)。その他、主として収納米払出の際の立会役としての封切役があつたが、これも多く町肝煎ないし加役から撰任し、蔵宿中から役料米を与えた。そのほか、蔵米預り中は蔵宿主は勿論、妻子手代にいたるまで遠行を禁じ、給人すべてに年頭礼詞をなさしむる等、その統制は末端に及んでいた。就中、倉庫業として当然ながら、倉庫の管理修補を厳にせしむるとともに、蔵宿家の家屋自体にも平常より必要以上の保存方を命じた。これは、石動などでは蔵宿が参勤時の本陣を兼ねることがあつたからである。また、毎歳蔵宿は誓詞(阿弥陀之裏起請)を徴されたが、それは蔵宿主分・妻子手代人分・米納雇人分にわたり、すこぶる精細なものであつた。かく蔵宿に対する藩の監督統制の厳であつたことは、給人知行制度の遂行上当然であり、蔵宿が藩の知行制度・収納組織の一部として有力な機能をもったからに外ならないとおもわれる。ゆえにそ

の反面、藩ができるかぎり蔵宿の保護につとめたことも、同じ理由で肯かれるところである。

蔵宿は石動などでは町人であるから(在方では百姓)、その地位は可なり低く、「蔵宿ニ付座席等先格心得之事」なる覚にも、役人衆へ応対の節、式台の内へ入るものとして、「御横目廻・浦廻・十村・(蔵宿)惣肝煎・外に封切役人」とあり、十村の次列であつた。かく別に札差・掛屋のごとく特別の待遇を与えられることはなかつたが、ただ石動の場合、蔵宿にして町年寄を兼ねることが多く、かかる際にはその待遇に間々見るべきものがあつた。

蔵宿の兼業については、やはり醸造業が主であつたとおもわれる。「宝暦九年七月蔵宿等へ被仰渡」にも、蔵宿共のうち酒造商売仕る者の酒米の仕入に関する規定があり、一般に幕府・諸藩の酒造業に対する統制は別に規制もあることながら、とくに蔵宿にして酒醸業を兼ねる場合には、自分蔵米を引請くることを禁じ、一般同様松米切手買請の手續を経べきものとしてゐる。紅屋平兵衛家は天保十年八月、同じ蔵宿仲間の藤田屋久右衛門より醤油株(醤油蔵、醤油桶等共、代銀六貫目)を買取っているから、醤油醸造にも携つたかとおもわれる。藩末にはまた兼業として鬻付業を営んでいたが、これは総じて些少のものであつたようである。

三 蔵宿数とその消長

前項で石動における蔵宿は、落政中期を通じて大体六軒と記したが、落政時代全期を通じては可なりの変動がある。その創設当時については知りえないが、寛文・元禄の盛時、すなわち篠嶋豊前より中黒六左衛門支配時代には十七軒、その今石動入、知行米高は四万七千八百石余を越えたとい⁽³⁵⁾。ついで延享年間、古蔵宿として、その後の推移上基準にされているものは、紺屋市左衛門・上田屋儀左衛門・酒屋新左衛門・浅屋彦左衛門・天秤屋安左衛門（以上越前町）・高儀屋半右衛門・平野屋助左衛門（以上中町）・北村屋理兵衛・紅屋万右衛門（以上飯田町）・井波屋太兵衛（鍛冶町）の十軒であつた。しかし、その後の変遷は可なり激しく、寛政元年十月には、紅屋平兵衛・藤田屋久右衛門・紅屋伝右衛門・紅屋惣左衛門・井波屋太兵衛・御器屋久左衛門の六軒に減少し、その預り米高も三万二千石余となつた。ついで文化十五年には、今村屋九左衛門・紅屋伝右衛門・藤田屋久右衛門・紅屋惣左衛門・紅屋平兵衛・油屋十右衛門の六軒、また文化八年には、今村屋九左衛門・紅屋伝右衛門・北村屋与四兵衛・紅屋惣左衛門・紅屋平兵衛・油屋十右衛門の六軒で、天保十年には、紅屋三軒の外、北村屋与四兵衛・権代屋六郎右衛門の五軒とさらに一軒の減少を見、落末までに紅屋伝右衛門株が可西屋新助に代つて、結局やはり五軒であつたようである。これらは蔵

宿株の売買譲渡によるもので、家運の盛衰にもなつて消長を見たわけで、総体的にはなお他蔵所の新立によつて打撃を蒙つた点もあるう。

紅屋三家のうち、その平兵衛家の株は極高で八千七百石であるが、その株の成立過程は可なり複雑で、およそつぎのごとくである⁽³⁶⁾。

三、六〇〇石 享保二十年六月紅屋久右衛門蔵株を引受

五〇〇石 新規御増高

一、五〇〇石 寛延二年六月牧屋五郎右衛門（北村屋理兵衛

三、一〇〇石 跡）の蔵株四、五〇〇石の内三分の一を引受

同年同月五郎丸屋嘉左衛門蔵株（もと浅屋彦右衛門株六、二〇〇石の内）引受

内

一、五〇〇石 紅屋惣左衛門へ渡し、代りは牧屋三郎右衛門

株の内紅惣が譲受けしものを平兵衛に交換

一、五〇〇石 紅屋惣左衛門へ渡し、代りは牧屋三郎右衛門

株の内紅惣が譲受けしものを平兵衛に交換

計

八、七〇〇石 御極米高

かくて各蔵宿の持高は、文化十五年でつぎのごとくなつて

紅屋惣左衛門	（紅惣）	一一、三〇〇石
紅屋伝右衛門	（紅伝）	七、七〇〇石
紅屋平兵衛	（紅平）	八、七〇〇石

藤田屋 久右衛門	(藤久)	五、二〇〇石
油屋 十右衛門	(油十)	六、三〇〇石
今村屋 九郎右衛門	(今九)	六、九〇〇石
計		四六、一〇〇石

すなわち、石動蔵宿全体の極米高四万六千六百石(この極高は草高であらう、紅屋平兵衛家の場合で預り米高実数は極高の五割八

分であるから、その率ではこの實際の預り高は二万六千七百三十八石となる)、最高が紅屋惣右衛門の一万三千三百石、最低が藤田屋久右衛門の五千二百石で、大体蔵宿六軒で平均七、八千石を受持っていたと見てよいであらう。いま、前記各蔵宿の年代的推移を判明する分のみ一覧せしむればつぎのとおりとなる。

延享年間 の古蔵宿	延享四年九月	宝暦・明和 安永年間	寛政元年十月	文化十五年	文政八年	天保十年七月
紺屋 市左衛門	紺屋 市左衛門	紺屋 市左衛門	御器屋 九左衛門	今村屋 九右衛門	今村屋 九右衛門	
高儀屋 半右衛門						
上田屋 儀右衛門	紅屋 伝右衛門	紅屋 伝右衛門	紅屋 伝右衛門	紅屋 伝右衛門	紅屋 伝右衛門	紅屋 伝右衛門 (天保十三年八月 可西屋新助)
酒屋 新左衛門	紅屋 伝右衛門	紅屋 伝右衛門	紅屋 伝右衛門	紅屋 伝右衛門	紅屋 伝右衛門	紅屋 伝右衛門
天秤屋 安右衛門	藤田屋 久右衛門	藤田屋 久右衛門	藤田屋 久右衛門	藤田屋 久右衛門	北村屋 与四兵衛	北村屋 与四兵衛
浅屋 彦左衛門	五郎丸屋 嘉右衛門	紅屋 惣左衛門	紅屋 惣左衛門	紅屋 惣左衛門	紅屋 惣左衛門	紅屋 惣左衛門
平野屋 助左衛門	紅屋 惣左衛門	紅屋 惣左衛門	紅屋 惣左衛門	紅屋 惣左衛門	紅屋 惣左衛門	紅屋 惣左衛門
井波屋 太兵衛	井波屋 太兵衛	井波屋 太兵衛	井波屋 太兵衛	油屋 十右衛門	油屋 十右衛門	権代屋 六郎右衛門
北村屋 理兵衛	牧屋 三郎右衛門 (但延享三年)	紅屋 平兵衛	紅屋 平兵衛	紅屋 平兵衛	紅屋 平兵衛	紅屋 平兵衛
紅屋 万右衛門	紅屋 平兵衛	紅屋 平兵衛	紅屋 平兵衛	紅屋 平兵衛	紅屋 平兵衛	紅屋 平兵衛

〔備考〕

一、紅屋平兵衛の蔵株のうち三、六〇〇石は、享保二十年六月紅屋久右衛門が糸岡某蔵宿跡をつぎ、更にその跡は紅屋万右衛門が

元文年中にこれをついだ。平兵衛は万右衛門の改名という。
一、浅屋彦左衛門、牧屋三郎右衛門の蔵株は、寛延二年六月結局紅屋三家で引受け配分した。その配分の状況は左のとおり(但し

浅屋の米屋等への譲合は延享二年)

浅屋 彦左衛門株六、二〇〇石

三、一〇〇石五郎丸屋嘉左衛門
三、一〇〇石米 屋安 亟
↓ 紅屋 惣左衛門
一、五〇〇石

牧屋 三郎右衛門株四、五〇〇石

一、五〇〇石
一、五〇〇石
↓ 紅屋 惣左衛門
↓ 紅屋 伝右衛門
↓ 紅屋 平兵衛
(交換)
(交換)

一、紺屋市左衛門蔵株の極高一〇、〇〇〇石は、そのうち七、五〇〇石を天明二年九月御器屋久右衛門へ譲り(代銀一四貫目)、また二、五〇〇石は藤田屋久右衛門へ譲る。

一、御器屋九左衛門極高七、五〇〇石は、そのうち一、二〇〇石を文化元年七月代銀九貫目で紅屋惣左衛門へ譲り、また一、二〇〇石を代銀七貫目と蔵所替賃四貫目で油屋十右衛門へ譲り、残り五、一〇〇石を文化二年七月代銀二一貫目で今村屋九右衛門へ譲る。

一、油屋十右衛門は文政十二年正預り米三、八〇〇石余を代銀三五貫目で今村屋九右衛門へ譲る。

一、権代屋六郎右衛門は、今村屋九右衛門、油屋十右衛門の計一三、二〇〇石極高(正味預り米七、三〇〇石余)を天保七年十二月代銀銀一二一貫目で福野寺井屋他八郎へ譲れる分を、さらに翌八年三月に引請けたもの。

一、紅屋伝右衛門極高七、七〇〇石は天保十三年八月可西屋新助へ譲る(代銀五五貫目)。

四 蔵下村

つぎに石動の蔵宿へ知行米を搬納すべき村々、すなわち蔵

下にあたる村々については、大体砺波郡のうち石動を中心とした北部の約百三十カ村であった。⁽⁴³⁾これを藩政中期の十村組でいえば、大滝組・埴生組・金屋本江組の西半・内嶋組の西半にあたり、落末の十村組でいえば、蟹谷組・野尻組・若林組・糸岡組・宮嶋組・五位組・国吉組に属する村々であった。しかし各村が必ずしも給人知行地になっているとは限らず、また十村組と蔵下村の区域とは必ずしも一致するとは限らない。すなわち、延享四年石動入村々から福野入を分割したときは、苗加村次郎左衛門組下村を分ったが、宝暦五年以後の杉木新町村蔵所新立運動(後述)に際しての分村は石動入のうち、埴生村佐次兵衛組下の内十カ村のみを分離せんとするものであった。⁽⁴⁴⁾しかし大体において、石動町蔵下の範囲は、北は氷見蔵所、東北は高岡蔵所、東は戸出蔵所、南は福光蔵所の蔵下村々と接し、石動までの距離最長二里半といわれる範囲である。すなわち、天保十年七月石動蔵宿五軒願書付中に、「然所村々ニおいて道程之遠近を申立候得共、御城

下入之村々と違、漸式里半計、手遠之村々ハ無御座候、然間右様手遠之村々ハ先年と違、近来ハ多分川舟ニ而相運藏納方格別骨折申義も無御座候」と見える。この蔵入距離の遠近は、古来農民の利害に深い関係があり、村々引免率も蔵入までの距離を考慮して定めたものといわれる。ことに砺波郡川筋のごとく用水路錯綜の地では、それに妨げられて馬背運搬がきかず、右文中にも見ゆるごとく、川舟利用の可能なときは比較的楽であったが、この舟運もまた用水関係の河川利用者と利害相対立するのであった。よって御定蔵所以外に中間地に蔵所新立の運動は絶えず繰返されているが、これに對し、古蔵所たる石動等の側から、蔵下村の分割は預り米の減少、蔵敷料の通減をきたし、また馬借等関係稼業の衰頽を惹起し、ひいては所の衰亡を意味したから、最も激しい反対運動を行ってきたのである。

なお、蔵宿一軒当りについての、蔵下村は、紅屋平兵衛家では、明治四年の「御弘方記帳」によると、砺波郡三九方村であり、大体他の蔵宿も一軒当りその程度であったとおもわれる。もちろん、この村々は給人知行所となっている村のみであつて、しかも一村で給人多数あるもあり、蔵入すべき蔵宿も二・三軒にまたがるもあつて、各蔵宿が地域的に一定の村々を蔵下としてもつというごときものではない。

五 蔵宿の給人数

さらに蔵宿一軒当りとして、その知行米を預った給人の数については、「天明八年七月前々預り申御給人様書出帳」に判印鑑帳等による調として掲ぐるところでは、

五郎丸屋嘉左衛門	六六軒
牧屋三郎右衛門	九九軒
紅屋万右衛門	一〇八軒
紅屋平兵衛	一八〇軒
文化四年木足帳表	九七軒
合 計	五五二軒

となつてゐる。⁽⁴⁷⁾

給人の階層は、人持組・御馬廻組・御小將組・組外・本組与力以下、御医者・算用者・御料理人にいたる各階層にわたるが、その内には時に知名の藩士を見出すことも稀ではない。前掲「御米預り申御給人様方記録」(享保二十乙卯年ヨリ)、「前々預り申御給人様書出帳」(天明八年七月改)両帳に、かの大槻伝蔵(三千八百石)の蔵宿が牧屋三郎右衛門として出ているなどその例である。いま右両帳に「慶応四年分御收納米御給人様方紅屋平兵衛蔵立御預り米弘方扣帳」を参照して、紅屋平兵衛蔵へ預けたる給人の主なるものを一覽せしむるとつぎのごとくである(但し慶応四年の預け給人一〇六軒から便宜知行高七百石以上を選出した)。

給 人	格	知行高	慶応4年 石 預り米高	知行所
長 九郎左衛門(長 町)	人持組頭	33,000 ^石 _(内2,000石 与力知)	279,421	赤丸・鷹栖等
前 田 弾 番(大手町)	人持組頭	18,500 ^石 _(内3,100石 与力知)	229,470	(安政4) 麴栖・笹川
前 田 平 大 夫(仙石町)	人持組	7,000 ^石 _(内1,000石 与力知)	260,211	(安政3) 柳原・神嶋・嶋・ 和沢・福岡・下妻・桜町
前 田 典 膳(小立野)	人持組	3,500 ^石 _(内500石与力 寛政11,千石減)	72,276	(寛政12) 赤丸等
前 田 兵 五 郎(西 町)	寄合組	1,000 ^石 _(内500石 与力知)		(慶応2) 経田
横 山 三左衛門(田 町)	人持組頭	30,000 ^石 _(内4,000石 与力知)	664,705	(文久元) 土屋・和沢・清水 ・福岡・胡麻嶋・下後蛭・ 田川・水牧
横 山 蔵 人(田 町)	人持組	10,000 ^石 _(内3,000石 与力)	215,000	(天保7) 開発・胡麻嶋・杉 谷内・白谷・棚田・谷坪野
横 山 内 蔵 助(田 町)	人持組	1,000(天明7新知)	27,346	(天保13) 芹川
横 山 豹 蔵(田 町)	御馬廻	500(天明7新知)	18,425	(文政3) 水牧
今 枝 民 部(高岡町)	人持組	14,000 ^石 _(内3,500石 与力知)	65,500	
今 枝 宗 軒(高岡町)	人持組	民部隠居	983	(慶応2) 木舟・本領八百
稲 垣 爵 ^(味嘈蔵 町)	御馬廻	1,000	39,111	(天保12) 上次郎嶋・高畠
茨木源五左衛門(堅 町)	御馬廻	2,050	129,652	(文政5) 五社・蓮沼
原 鉄 之 助(出羽町)	人持組	1,280 ^石 _(安政3 500加)	72,307	(元治元) 七社・赤倉
富 永 栄 喜 記(長 町)	寄合組	1,050	13,822	(文化5) 石名田
戸 田 鉄 男(堅 町)	寄合組	700	26,258	(慶応2) 野寺
大 音 主 馬(小立野)	人持組	4,300	70,890	(文政7) 小矢部・篠嶋
岡 嶋 右 近(備中町)	御馬廻	1,500	62,577	(天保9) 石堤・後谷
岡 田 秀 之 助(長 町)	御馬廻	800	29,789	(天保13) 桜町
大 橋 織 江(古 道)	御馬廻	800 ^石 _(内400石 天明減)	15,405	(安政2) 荒屋敷
和田源次右衛門 ^(牛右衛 門橋)	御馬廻	800	17,807	(天保15) 芹川
渡 辺 裕 次 郎(内馬場)	御馬廻	700	2,257	(文久3) 西中
葛 卷 隼 之 助(仙石町)	人持組	2,000	121,658	(嘉永元) 老歩式歩
加 藤 修 理(左近橋)	寄合組	1,500	62,577	(享和2) 淵谷・上野
武 田 蔵 人(長 町)	御馬廻	800	29,610	(文政12) 養輪
津 田 玄 蕃 ^(大手ノ 下)	人持組	10,000 ^石 _(内1,500石 与力)	61,553	田川・東宮森・下次郎嶋 (文政2) 笹川
中 川 式 部 ^(堤町ノ 後)	人持組	5,000 ^石 _(内1,000石 与力)	99,216	(文化13) 安養寺新・小神
永 井 織 部 ^(岩根馬 場)	人持組	2,500 ^石 _(内500石減 150石文政7減)	70,073	清水・長

上木九郎右衛門(土 橋)	御馬廻	1,000 ^(内200石減)	63,133	(慶応元)松永
野村五郎兵衛 ^(堤町ノ後)	御馬廻	1,200	104,768	(安政3)五社・本領八百・名畑
野村与三兵衛(高岡町)	御馬廻	1,700	25,965	(慶応2)綾子
九里覚右衛門(堅 町)	御馬廻	1,500 ^(内500石減)	39,111	(嘉永)水嶋
山崎庄兵衛(小立野)	人持組	5,500 ^(元治以後3,000石)	50,000	(慶応2)福町・坂又・野寺
山本定之助 ^(広坂ノ下)	御馬廻	1,000	50,000	(慶応2)下次郎嶋・田川
松平久兵衛(馬場六)	人持組	1,500	62,577	(万延元)石王丸・赤倉
不破伊織 ^(彦三番)	御大小将	1,000		明和8まで石動入
小堀左内(高岡町)	御馬廻	2,000 ^(内500石与力)	16,844	(元治元)末友・四十万
駒井清二郎(田 町)	御馬廻	700	26,258	(嘉永元)浅地
寺西弾正 ^(尾坂ノ下)	人持組	7,000 ^(内500石与力)	113,828	(慶応2)西中・芹川
寺西宗余 ^(尾坂ノ下)	人持組	徳三郎隠居		(慶応元)経田
浅井鷹五郎(高岡町)	御馬廻	1,000	8,539	(慶応2)福住
青地采女(長町五)	御馬廻	800		(天保11)須川
佐々木孫兵衛 ^(石屋小路)	人持組	1,000 ^(元明6マデニ2,100石)	87,680	(天保14)桜町・下中
佐野 鼎		150	33,524	
菊池大学(升 形)	人持組	3,200 ^(内500石与力)	100,051	(文政10)蓑輪・小森谷
北川寛兵衛 ^(彦三番)	御馬廻	1,200	43,608	(天保3)上野・金屋本江新
篠原左次右衛門(折違橋)	御小 将	1,000 ^(内200石与力)	39,111	(天保3)渋江・経田 (元治元)上向田
土方与八郎(木新保)	御馬廻	1,300 ^(800石減)	11,072	(文化12)舞谷
仙石堅二郎(三 社)	寄合組	2,000 ^(内200石与力)	83,809	(慶応2)和沢・蓑輪
杉浦善左衛門 ^(味噌蔵町)	御馬廻	800	17,807	(嘉永5)木舟

これによって、藩末における紅屋平兵衛家の預り給人の大体は知りえられるとおもうが、とくにいわゆる七手組八家といわれた給人家(右表では長九衛左衛門・前田弾番・横山三左衛門がそれに当る)などの預り米は、量においても大口であり、米場における建米としても銘柄扱いをされたものであるから、蔵宿においても、二重俵装にするなどの特殊の取扱をなしたのであり、その費用は慣例的に納米村方をして負担せしめたようであるが、とくに注文によるときは給人家から代料を申受けたこともあったようである。

六 蔵敷米

蔵宿の営業上の主収入た

る倉庫預り料、すなわち蔵敷米は、一般に石に二升、すなわち二分と定められていた（もっとも能登の蔵宿では石に一升六合が普通といわれたが、また二升のこともあったという）。この蔵敷米は収納の時の口米から出すといひ、またもともと口米は給人収納米監督のため、人を百姓の計に遣す手数料であるとの説もある。前掲「前々預り申御給人様書出帳」（天明八年七月改）末尾附載の、蔵宿五郎丸屋嘉左衛門の延享三年分預り米高では、奥村助右衛門以下五三軒、預り米高一、九四〇石九斗四合で、うち三七七石六斗二升三合が蔵敷で、残り一、九〇三石二斗八升一合が給人預り状表高である。すなわち、蔵敷米は給人預り米高の内から差引くのではなくて、百姓収納米の内から取るのである。なお、「御給人様方御知行所村附帳」（文久元年か）で一例を示せば、長大隅守（左衛門）の知行所鷹栖村・水嶋村・壱分歩式歩村からの蔵宿紅屋平兵衛家への収納米三〇六石で、うち蔵敷米六石を差引いて、残り三〇〇石が預り状表高である。よってこの蔵敷二分は預り状表高に対する二分であるが、収納はそれを加算してとるのである。

紅屋平兵衛家で年々収入としていた蔵敷米の実数はといえ、嘉永五年より万延元年にいたる八年分（但し嘉永七）の平均で九九石九斗九合五勺（預り米高平均は同年間平均で五、〇四五石四斗八升四合二勺）となる。なお平兵衛家は蔵宿としての極高では前述のごとく八、七〇〇石である。石に二升の蔵敷をとる蔵宿が一般に裕福なるごとく考えられそうであるが、必

ずしもそうでなかったことは、享和二年七月御算用場奉行の収納代官手代及び蔵宿の不正防止に関する稟請に、蔵宿が刺米その他の不正利得を計るのも、御定の蔵敷のみで成立ちがたいからであるとの点を指摘しているのでも察せられよう。この蔵敷米は、勿論蔵宿がこれを売却して収入とするが、それも自由販売は許されず、所定の米取次人を通じてなされなければならなかった。また別に蔵宿が商人へ払米をなすときに、「出蔵敷」と称して特別に保管料をとる弊もあったよう、藩の禁ずるところであった。

七 蔵替の問題

およそ給人と蔵宿との関係は代々にわたり一定していたが、給人がどの蔵宿を指定するかは原則として自由であった（勿論給人から藩への届出は必要であつたが）。給人数、すなわち預り米高の多寡はすなわち蔵宿の収入の増減を意味したから、蔵宿間に得意先たる給人の争奪が行われたこともまた避けられないことであつた。延享二年七月の津田奎書立帳に、

一 今石動・水見・城端蔵宿中預り米給人蔵替之儀者、精誠蔵宿肝煎承合届、セリ落之様無之様、先規申渡有之候処、去年以来蔵宿中金沢町中買之者令会通、惣而給人中誰々ハ銀子取替等宜蔵宿之様ニ方便を以爲申馴、自然其蔵宿共名を揚候様ニ中買申通候ニ付、前々預り来候古蔵宿等手前、対其給人不働子細無之分も、

去年蔵替之給人蔵宿共預り米増減之儀、金沢町中中買共自由ニ仕候儀、不届之蔵宿共所為^ニ相聞候、別而今石動蔵宿仕形不宜様ニ相聞候、

と見え、蔵宿と金沢市中の中買とが結托して、某蔵宿は金融上有利であると説いて、従前の古蔵宿から新蔵宿へ蔵替せしめることが多かったのである（この点は前述蔵宿手代誓詞中にも、手代が同じ方法で蔵宿せり落を謀ることの禁が見える⁶⁰）。

而して實際上、この蔵所・蔵宿の変更は給人の代替りに際してもっとも多かったので、落もこれを禁ずることはできなかったが、給人が先蔵宿に対する借財上蔵替することは極力これを制止せしめたのである。これ蔵宿保護政策として当然であったが、實際問題としてはすこぶるその事例が多かったようである。この点に関して、延享四年書立に、重ねて給人跡目・残知等の際の蔵宿変更防止策として、あらかじめ蔵宿側より町奉行所に断りおき、給人より変更をいいくるときは、町奉行所の許可なくしては預りがたしと答えよと令している。また、天明六年二月十日杉木新町村蔵所新立願に対する改作奉行付札に、「給人知蔵所替之義、御様子も有之候ニ付相成不申趣、先年以來願書申度ニ申渡置候所ニ⁶¹とあり、申請願毎に却下している。総じて、蔵宿からは古い給人關係を尊重する風があり、一旦蔵替があつても、古蔵宿という事実があれば、蔵宿仲間でもこれを遵守せざるを得なかったのである。蔵宿株譲渡に際して、蔵所替賃を受渡しすることの

あつたのも、こうした意味からであるとおもわれる。給人と蔵宿⁶²に関して旧慣尊重の事例は多いが、左に二三例を掲げておく。

一、文化十一年八月紅屋平兵衛家給人多田三郎（御馬廻、三百五十石）跡代替り主計に御所附の出た折、油屋十右衛門より多田家は自己の古給人たるを主張して油屋に預ることになった。よつて蔵宿惣肝煎北村屋専右衛門調停を以て、代り給人所附の出ずるを待つて翌々十三年五月北村三右衛門（御馬廻・三百二十石）を紅屋平兵衛預りとした。預り高は両者同額である。

一、給人神尾九十郎につき、先代助七時代北村屋次郎左衛門が宝暦六年蔵宿を勤めた由緒を以て、次郎左衛門の權利をつぐ紅屋平兵衛より横目録を上げ、結局紅屋一類伝右衛門新入となる。

一、慶応元年五月加須屋十左衛門（八郎兵衛跡、御大小将・二百五十石）御知行出は紅屋平兵衛へあつた処、可西屋次助方に天明年中の判印鑑ならびに御除米帳旧記あるにつき、五郎丸屋嘉左衛門株分の理を以て主張され、平兵衛には証拠なくて可西屋入となる。可西屋は五郎丸屋株を分けた紅屋伝右衛門のあとである。

一、文化九年五月、前田伊勢守（人持組頭、一万八千五百石）嫡子右近に御鼻紙代六十余石紅屋平兵衛で御所附が出た処、以前宝暦二年まで同家大炊御鼻紙代六十九石余が紅屋伝右衛門方に五杜村で預り來つた由緒で此度も紅伝が預るべきを主張し、結局右近御鼻紙代は紅伝へ譲り、代り給人を、同年中村八郎左衛門三十石二升四合、同年九月九津見源太郎二十九石六斗三升三合

で交換とした。

一、文化十四年今枝家与力から本組与力に召出された神原武兵衛（百五十石）の御所附は、旧来の關係で今村屋九右衛門へ出たが、今枝家と關係深い紅屋平兵衛藏宿では、今枝家の縁をもって兩宿預りとなる。文政元年今枝家与力から本組与力に輕じた笹井元右衛門（百五十石）の場合も右同様である。

なお、前記藏宿間のせり落の場合の例としては、宝曆四年、人持奥村豊次郎預り米が従来紅屋惣左衛門三分一、紅屋伝右衛門三分二であったのを、伝右衛門・惣嘉右衛門の策動で全額伝右衛門へ藏替せしめんとした時、嘉右衛門への制裁の意味もあって、惣左衛門・伝右衛門半々にせしめられていた。⁽⁶⁴⁾ また文久二年、横山三左衛門より收納米増加につき、従前の藏宿紅屋平兵衛の外一軒へ分藏せんとした時は、平兵衛方より延享二年の格合に背き、藏宿仲間の統制を紊るものとして反対し、これに成功している。⁽⁶⁵⁾

八 農村への貸附

藏宿に対する給人收納米は、知行所の百姓自身がその納入に当るものであったから（但し藏宿が藩の收納機構を代行したものではなく、收納に当っては十村配下の代官―御藏の場合―、手代―町藏の場合―が監査の任に当たったのである）、知行所百姓と藏宿の關係はもっとも密接であった。したがって、收納に当って藏宿と百姓の間に目私・目こぼしをはじめ、種々の不正があ

ったことはむしろ普通となっていた。⁽⁶⁶⁾ 目私米というのは、計立てを終わった米を俵装する際、自然に少量の米が俵の目を見くぐって落こぼれるをいい、石に五勺ないし七勺位はふつうであったという。しかしここに目私米というのは、それに事寄せ故意に刺を入れて余米をとる刺米を含めての不正をいうのである。⁽⁶⁷⁾ これに類するものに簓こぼし、箕こぼしなど種々ある。これら收納に当っての刺米、こぼし米等による年々の損失は、享和二年七月の御算用場奉行稟請では、御藏入、町藏入を通じて、全領内石に三升として現米一万七千石計、四ツ免の草高に直して三万八千二百石余の多きに上ると計算されている。⁽⁶⁸⁾ したがって、この種不正防止はもとより、一般に收納・俵装・乾燥等に関する法令は藩政期全般を通じて夥しいものがあるが、町藏などでは、わざと納方を遅延せしめ、百姓の宿泊を余儀なくせしめる風があった。⁽⁶⁹⁾ これは藏宿所在地に金が落ちるからで、総じて藏所町方への百姓の出入は所の繁栄を意味したのである。

このほか、納米に当って藏宿側において納米の良米を売払い、悪米を以て給人に払渡すことがあり、この点は百姓方でも同じであった。すなわち「藏宿誓詞巻」に、⁽⁷⁰⁾

一 藏宿中收納米百姓持参仕候節、其村々出来米ツキ次第

ニ念を入收納仕可申候、若上田之百姓見付、宜米売候

而他村并今石動町之者と馴合、悪米ニ替持参仕候ハ、

收納仕間敷候事、

東宮森村肝煎太右衛門外上納米皆済借証文

寛

一 納米

納米

今、森村肝煎太右衛門外上納米皆済借証文
一、納米
二、納米
三、納米
四、納米
五、納米
六、納米
七、納米
八、納米
九、納米
十、納米
十一、納米
十二、納米
十三、納米
十四、納米
十五、納米
十六、納米
十七、納米
十八、納米
十九、納米
二十、納米
二十一、納米
二十二、納米
二十三、納米
二十四、納米
二十五、納米
二十六、納米
二十七、納米
二十八、納米
二十九、納米
三十、納米
三十一、納米
三十二、納米
三十三、納米
三十四、納米
三十五、納米
三十六、納米
三十七、納米
三十八、納米
三十九、納米
四十、納米
四十一、納米
四十二、納米
四十三、納米
四十四、納米
四十五、納米
四十六、納米
四十七、納米
四十八、納米
四十九、納米
五十、納米
五十一、納米
五十二、納米
五十三、納米
五十四、納米
五十五、納米
五十六、納米
五十七、納米
五十八、納米
五十九、納米
六十、納米
六十一、納米
六十二、納米
六十三、納米
六十四、納米
六十五、納米
六十六、納米
六十七、納米
六十八、納米
六十九、納米
七十、納米
七十一、納米
七十二、納米
七十三、納米
七十四、納米
七十五、納米
七十六、納米
七十七、納米
七十八、納米
七十九、納米
八十、納米
八十一、納米
八十二、納米
八十三、納米
八十四、納米
八十五、納米
八十六、納米
八十七、納米
八十八、納米
八十九、納米
九十、納米
九十一、納米
九十二、納米
九十三、納米
九十四、納米
九十五、納米
九十六、納米
九十七、納米
九十八、納米
九十九、納米
一百、納米

今、森村肝煎太右衛門外上納米皆済借証文

納米

今、森村肝煎太右衛門外上納米皆済借証文

栃谷村次郎左衛門年貢米入不足銀借用証文

寛

一 納米

納米

今、栃谷村次郎左衛門年貢米入不足銀借用証文
一、納米
二、納米
三、納米
四、納米
五、納米
六、納米
七、納米
八、納米
九、納米
十、納米
十一、納米
十二、納米
十三、納米
十四、納米
十五、納米
十六、納米
十七、納米
十八、納米
十九、納米
二十、納米
二十一、納米
二十二、納米
二十三、納米
二十四、納米
二十五、納米
二十六、納米
二十七、納米
二十八、納米
二十九、納米
三十、納米
三十一、納米
三十二、納米
三十三、納米
三十四、納米
三十五、納米
三十六、納米
三十七、納米
三十八、納米
三十九、納米
四十、納米
四十一、納米
四十二、納米
四十三、納米
四十四、納米
四十五、納米
四十六、納米
四十七、納米
四十八、納米
四十九、納米
五十、納米
五十一、納米
五十二、納米
五十三、納米
五十四、納米
五十五、納米
五十六、納米
五十七、納米
五十八、納米
五十九、納米
六十、納米
六十一、納米
六十二、納米
六十三、納米
六十四、納米
六十五、納米
六十六、納米
六十七、納米
六十八、納米
六十九、納米
七十、納米
七十一、納米
七十二、納米
七十三、納米
七十四、納米
七十五、納米
七十六、納米
七十七、納米
七十八、納米
七十九、納米
八十、納米
八十一、納米
八十二、納米
八十三、納米
八十四、納米
八十五、納米
八十六、納米
八十七、納米
八十八、納米
八十九、納米
九十、納米
九十一、納米
九十二、納米
九十三、納米
九十四、納米
九十五、納米
九十六、納米
九十七、納米
九十八、納米
九十九、納米
一百、納米

今、栃谷村次郎左衛門年貢米入不足銀借用証文

納米

納米



(いずれも富山県石動町千葉啓三氏所蔵)

とあるごとくである。この納米は通例夏上用入百日目頃より一定の歩入を以て徐々に蔵入し、其年中に全納するが、一方蔵出しは（払米については後述）すべて庫口渡、すなわち倉庫の入口より蔵出しをするのが例であった。⁽⁷¹⁾この時、雇人・駄賃持等にして蔵戸前や道路上で俵より米をはじり取り収入とするもあったという。⁽⁷²⁾

上記のごとき蔵宿に対する百姓収納関係は、当然両者の貸借関係を予想せしめる。事実、蔵下村々の蔵宿に対する貸借は、百姓個人として、また村役人としてその事例がはなはだ多いのである。

而してその殆んどは蔵入米の不足による村方未進米によって生じている。明治三年十一月十七日東宮森村肝煎太右衛門外の紅屋平兵衛への証文では、右十七日納入分の内、大雪のために運搬が沮まれたために、十八石の不足米を生じたので、二十三日まで延期を願い上納米請取書の貸渡を請うており、こうした皆済貸の事例は、なお二三に止らないところを見るとむしろ普通であったのであろう。ふつう不足米に対しては、蔵宿より現米の融通を受け補填に当てたのであり、次の証文はその例である。⁽⁷³⁾

覚

一 式石者
一 壺石者

メ 三石者

新京榊

甚左衛門
九 兵衛

右、私共御給人様当御年貢米入不足ニ手聞申ニ付、各江御頼申入、米かり請当御皆済ニ相立泰奉存候、然上者来年十月中ニ急度斗済可申候、若相滞候ハ、入米之内ニ而御引取可被成候、為其後日之証文如件、

嘉例谷村肝煎

宝暦十年十二月十四日

甚左衛門 ㊦

組合頭

九 兵衛 ㊦

同

次郎三郎 ㊦

紅屋平 兵衛殿

紅屋惣左衛門殿

右之米返済之節、米直段高下ニ無構、石ニ付三斗宛利米相添、元利相済可申候、以上、

右において三割の高利に注意すべきである。しかし最も多くは蔵宿から現銀の融通を受け、代米を購入して皆納するのであった。天保八年四月十一日野端村権四郎・与兵衛借用状に、「右之銀子借用仕御米買入御皆済」云々とあるごとくである。この例ははなはだ多いが左に一例を掲げておく。⁽⁷⁴⁾

覚

一 五百目 文銀

私共在所百姓中、御当納入不足米手段無御座候ニ付、貴殿相頼右銀子借用仕、御皆済相仕廻泰奉存候、然上ハ来未四

月五日切、元利共急度返済申候、為其証文如件、

紅屋

天保五年午十二月十一日

千石村肝煎

平兵衛殿

八兵衛（花押）

組合頭

この種借用証文はなお類例が多いが、煩を避けて左に表記しておく。

伝右衛門（花押）

年	代	村名	借	人	借	高	理	由	返済期限	備考
宝曆一〇・一二・一四	嘉例谷村	肝煎甚左衛門・組合頭九兵衛・同次郎三郎	三石				收納米不足	来年十月	利足石ニ三斗	
文化元・二・四	千石村	八兵衛	二貫一〇〇目				蔵米不足	文化二より七ヶ年		
文化八・七・四	西中村	肝煎庄左衛門・組合頭与九郎外三人	一六貫二二三文三分八厘 一石三斗六升八合				蔵米不足	文化八より七ヶ年		
文化一三・一二	法楽寺村	長兵衛	三〇〇目				收納米不足	来年三月一〇〇目		
文化一五・正月	浅地村	勘右衛門	二〇貫 二〇〇目					当十月		
文政二・四月	杉谷内村	肝煎伊右衛門・組合頭小兵衛外一人	五石二斗七升四合 二一〇匁九分六厘				收納米不足	当七月五日切		
文政四・一〇・一八	荒屋敷村	久蔵	一〇〇目					当十二月五日切		
文政六・七・三	石名田村	清三郎	一貫目					十月切		
文政七・一二	杉谷内村	肝煎伊右衛門・組合頭次右衛門外一人	四七六匁二分五厘				收納米不足	文政八年三月		
文政七・一二	法楽寺村	肝煎長三郎・組合頭徳左衛門外一人	二五〇目					来年皆済まで		
文政九・三	安楽寺村	肝煎庄兵衛・組合頭清蔵外一人	一〇〇目					当十二月切		
文政九・一一	小矢部村	肝煎彦右衛門・組合頭六郎兵衛	七〇〇目					来十一月切		
文政一〇・一二	安楽寺村	肝煎庄兵衛・組合頭清蔵外一人	五〇〇目				收納米不足	来年十一月切		
文政一一・一二	北市村	勘太郎	五〇〇目					来十一月五日切		

文政一・一・二月	四日市村	掃部	三貫目			
文政二・五・一六	石名田村	清三郎	一貫目			利足月一分二厘
文政二・一・二月	寄嶋村	彦右衛門	五〇〇目			東福久新村切高代にて返済
文政一三・閏三月	安楽寺村	肝煎兵四郎・組合頭清藏	三一五匁一分二厘	收納米不足	当九月切	
天保二・四月	安楽寺村	同上	三七六匁一分二厘	〃	当十月切	
天保二・五月	鳥倉村	宗左衛門	一貫四五〇目	收納米不足		但し嶋村庄治郎充
天保二・七月	寄嶋村	彦右衛門	一貫二〇〇目			
天保三・五月	三日市村	久次郎	一貫目		当七月五日切	
天保三・一二月	下向田村	中谷三右衛門	二貫目			
天保五・八・一六	浅地村	組合頭作兵衛外二人	一〇〇目	魚津召指添 人雑用で	当暮万難の時節ま	
天保五・一・二・一一	千石村	肝煎八兵衛・組合頭伝右衛門	五〇〇目	收納米不足	来年四月五日切	
天保五・一・二月	栃谷村	次郎左衛門	一貫六〇〇目	收納米不足	来年七月切	次郎左衛門持山八丁分山証文抵当
天保五・一・二月	神嶋村	又助	一〇〇目		来年十月切	
天保五・一・二月	赤倉村	嘉右衛門・京次郎	三貫八九〇目		来年十一月切	
天保六・一・二・一八	花尾村	肝煎七兵衛・組合頭七右衛門 外一人	一〇石	收納米不足	来年三月皆済まで	
天保六・一・二・一九	千石村	肝煎八兵衛・組合頭伝右衛門	三五〇目	〃	来七月五日切	
天保六・一・二・一九	四日町村	掃部	二貫四〇〇目			
天保六・一・二・一九	四日町村	掃部	四貫一〇〇目			
天保七・二・九	赤倉村	八兵衛	一貫目			

天保 七・一二月	寄嶋村	彦右衛門	一貫八〇〇目	收納米不足	来年十一月五日切	
天保 七・一二月	鳥倉村	肝煎宗右衛門外	一貫二〇〇目	"	来年十二月切	
天保 七・一二月	神嶋村	八右衛門	一〇〇目		来年三月切	
天保 八・三月	田川村	八郎兵衛	六〇〇目	收納米不足	当七月切	
天保 八・四・一	野端村	権四郎・与兵衛	一六〇目(二口)	"	当十一月五日切	
天保 八・四・二五	安楽寺村	肝煎兵四郎・与合頭清蔵外一人	三〇〇目	"	当九月五日切	
天保 八・五・五	千石村	八兵衛	二二四勿二分五厘	收納米不足	当十一月五日切	
天保 八・一二・二七	赤丸村	喜左衛門外	一貫一〇〇目	"	来二月五日切	
天保 一一・一二月	安楽寺村	肝煎兵四郎・組合頭清蔵外一人	一〇〇目 四斗九升六合	蔵米不足	来年十月五日切	
天保 一二・一二月	三日市村	又三郎	一〇〇目		来十二月切	
天保 一三・一二月	神嶋村	与兵衛	四〇〇目		来年三月切	
弘化 三・五月	石坂新村	市兵衛	二〇〇目		当月廿日切	
明治 三・一・一七	東宮森村	肝煎太右衛門・組合頭八十郎	一八石	上納不足	当三十三日迄	皆済貸
明治 三・一・二四	藤森村	肝煎善右衛門・組合頭与右衛門	六石五斗	"	当晦日迄	"
巳 一一・四	下向田村	三左衛門	四〇〇目			
(年不詳)・一二月	三日市村	市十郎	二四七目		十二月廿六日切	

右は借用証文残存分なること(返済不履行などの)を考慮に入れて考えれば、実際の貸借事例は夥しい数に上るであらう。しかし、元来町人の郡方百姓に対する貸借は藩の禁ずる

ところであり、その点蔵宿に關しても、宝曆九年七月石動奉行金森多門より蔵宿等への被仰渡にも、「一蔵下百姓等よしみを以猥申談手廻仕候風聞有之候、惣而御郡方へ対し貸借共

相互^ニ、無^ニ之^ニ咎^ニ、候^ニ条、向後仮令密々申談候筋有^ニ之、指問候御訴出候共、理非之子細^ニ不及貪着致間鋪之事」とあり、町方蔵宿と郡方百姓との貸借はありえないものとして、若しこれを犯しでの貸借についての訴に對しては一切とり合わないとしている。なお、かの天明五年の徳政には、同六年正月、蔵宿（主として郡方蔵宿）に對する百姓の未進米過分に於て年々利足重り難渋するものは用捨せしめ、天明四年以来借用証文の書替なきものは無効としている。⁸⁰さらに文化十四年七月には、一般に百姓に對する利足貸の禁を重ね、利足貸の分は元利差引することを許している。⁸¹當時とくに石川郡における高利の風が強調せられており、切角の引免救済もこの種高利に吸とられる弊があつたからであつた。ついで天保八年七月の徳政では、郡方百姓相互の助力無利足貸、并に尿物・稼の品仕入のための前貸分は年賦相對差引にせしめたが、町方への貸借は御定のごとくすべて無指引たるものが附け足されている。⁸²

もともと町蔵宿の農村貸付が御定の外であつてみれば、如上の仕法がどの程度影響を及ぼしたか疑問の外であるが、紅屋平兵衛家の農村貸附金の内には、無利足年賦返納のものもないではない。すなわち、文化八年七月西中村に對する蔵不足米残り七石九斗五升八合を、同年より十四年までの無利足七力年賦とし、文化十二年四月千石村八兵衛の返済金残二貫百目を文化十四年より無利足七力年賦となせるとときであ

る。⁸³しかし、これらは返済人の特別の難渋に對する相対的な処置であつて、法令によるものではなかつたろう。

町方蔵宿の農村貸附の性格が以上のごときものであれば、蔵宿証文の中に切高に關するものが見えないのはむしろ当然であるかもしれない。事実紅屋が農村金融によつて切高を獲得した形迹は今のところ全くないのである。ただ、蔵宿金融がその裏面において、農村内部における土地売買を促進する作用のあつたことは想像にかたくない。例えば、文政十二年十二月寄嶋村彦右衛門の西明寺屋伊兵衛宛（紅屋平兵衛手代）五百目借用証文には、東福久新村切高代銀を以て返済に充てる旨が記されており、天保二年五月の鳥倉村宗左衛門証文では、宗左衛門収納米未進を補うため持高の内五石（代銀一貫四五〇目）を嶋村庄治郎に譲り、同年の作徳米一石四斗五升は買主指定の蔵へ斗附し、來春を以て名儀替するといっている。ただ一通、天保五年十二月栃谷村次郎左衛門の西明寺屋伊兵衛に對する一貫六百目の借用証文では、次郎左衛門持山の内八丁分の山証文（天保三年より四年にかけて、右山を栃谷村仁左衛門・懸作西明寺村嘉右衛門・同村宗右衛門より切山したもの）⁸⁷抵当のことがある。天保九年九月の紅屋惣左衛門の石動奉行への家政緊縮に關する願書付中に、「然所往古⁸⁸少々持伝來ル山も御取揚ニ相成、且在方等にも少々貸附銀も指引相立不申、融通方必至⁸⁹至指支」とあり、惣左衛門家では天保縮高で取揚げられた持山も事実あつたのであるから、すでに切山に關し

て然りであったとすれば、田地においても如何ともいい難い。「高岡史料」下によれば、天保仕法に際しての書上で、同町手崎屋彦右衛門一人にして、文化・文政年間に取高したものの七・七石余の多きに上っている。しかしかような事實は、少くとも史料の上では、紅屋平兵衛家に關してこれを檢することができない。恐らく、そうした証書は破棄せられたこともあるうし、一面禁令はもとよりであるが、蔵宿という稼業上これをなすに多くの束縛があったものと考えられる。しかし、他の郡方蔵宿についてはなお事情は少しく異なるものがあったであろう。

註

(1) 例えば「日本經濟史辭典」・蔵宿項。

(2) 以上「天保九戊戌閏四月御上使様御尋之品客帳」(千葉啓三氏所藏文書の内)、町役人勤務状況については、天保年間町肝煎たりし紅屋平兵衛の「日々御用手扣」八冊(同上)が参考になる。なお奉行は氷見・城端支配兼帯である。

(3) 「加賀藩史料」第五編・元禄三年是歳条(御算用場覚書)

(4) 「天保九戊戌閏四月御上使様御尋之品客帳」、町名はつぎのとおり。上越前町・中越前町・下越前町・中町・上飯田町・中飯田町・下飯田町・鍛冶町・上新町・中新町・上糸岡町・中糸岡町・下糸岡町・紺屋町・細工町・南上野町・北上野町・上新田町・中新田町・下新田町・川原町・下新町・博労町・御坊町・柳町・今町

(5) 今石動町ではこの地子米を町蔵米で上納したこともあったようであり、町財政と蔵宿との密接な關係を証するものといえよう。なお、「加賀藩史料」第四編貞享元年四月石高改究り高目録には今石動町の地子米三百九十石とある。

(6) 「天保九戊戌閏四月御上使様御尋之品客帳」

(7) 殖生村の今石動郷加宿は、「殖生村佐次兵衛手扣」(石動町圖書館寄託太田文庫)に拠れば寛永十五年にはじまるという。また殖生村のほか、立野村も同じ六日間の助宿であったこと、慶応二年二月の砺波・射水郡奉行達書に見える(同上太田文庫)。

(8) 「福野村#杉本新町村蔵所願二付戸出村等より願書等之扣」(千葉文書の内)

(9) 同上

(10) 河北郡十七村百姓の今石動への牽売馬は一種の救済法として特許されていたもので、その沿革は相当古く、元禄十六年二月今石動町奉行篠島主馬と河北郡改作奉行長瀬瀧兵衛・永原権丞との間に、河北郡牽売馬の今石動への米取引はすべて現銀とし、さなきものは町へ入れないとして定めている(改作所日記)。而して石動では、この河北郡牽売馬から徴する口錢をもって宿方御用金に充てていたのである。すなわち石動には牽売馬問屋があり、町に役銀(寛政五年で七百五十目金)を出していた。「御仕法方等時々被為仰渡留」(千葉文書の内) 参照

(11) 「石川県史」第三編・禄制、ならびに佐々木潤之介氏「加賀藩制成立に關する考察」(社會經濟史學二四一一)

(12) 金沢米穀取引所沿革

(13) 北国新聞。大正十一年七月四日

(14) 「福野村#杉本新町村蔵所願に付戸出村等願書等の扣」

(15) 「蔵宿御格式帳写」(千葉文書の内)。同書には本文達に引きついで同年十一月廿七日の今石動奉行篠島豊前の蔵宿主#妻子の遠行禁止外二条の達がある。

一般的に百姓米の商品化にとまなう代官・十村・商人の高利貸的収奪と未進の増加、おしなべての知行地農民の疲弊と給人、ことに小給人の現地經濟上の困難、收納上の桎梏から(佐々木氏前掲参照)、給人知行米の收納を統一的に藩が肩代りし、その保管・販売を媒介的に統制した蔵宿制度は給人救済上からも必然であった。この際、ローカルな市場所在地における町人・百姓が改作法以前の給人知行地に対し相對蔵元的機能をと

の程度にもったかは疑問である。かえって十村入替におけるように新規の百姓的商人の蔵元関与が考えられよう。

- (16) 同上ならびに「加賀藩史料」第三編・寛文二年七月十日条(御定書)

この加賀三・能登二〇・越中一三という蔵所数は、夫々當時における三国の地方流通圏の範囲と発展度を示して興味があり、中世の流通圏から藩制成立期の必要が対応せる形といえよう。

この町蔵所に対して落収納蔵はその数が多く、位置の選定も積出の便などの点から可なり差異がある。給人地方知行圏とは別のより直接の藩農政上からの指定を考えしめる。

- (17) 「加賀藩史料」第三編・承応三年七月廿九日条(理塵集)

- (18) 同 上 第六編・享保十一年八月条(御郡典)

- (19) 同 上 第四編・寛文三年八月十六日条(庁事通載)

- (20) 今石動蔵宿数の移動については後述、高岡は安政五年平田屋善左衛門等六軒(高岡史料一下)。戸出は承応三年創設期には十二軒あったが、宝暦五年には三軒に減じたという。(福野村井杉木新町村蔵所願ニ付戸出村等願書等之扣)。また金沢は「金沢米穀取引所沿革」に拠る。

- (21) 石動で天保十三年八月、紅屋伝右衛門蔵株を買取った可西屋新助は、同地高橋屋小右衛門の弟で江戸下谷可西屋弥兵衛に勤めていたものであった。株の極高は七千七百石、譲渡代は五十五貫目である。

- (22) 「石動町分限見合鏡」(文久年間カ)なる分限番附があるが、それに見える蔵宿は、紅屋一家の惣左衛門が西の関脇、紅屋茂左衛門が西前頭、紅屋平兵衛は勸進元、同伝右衛門は頭取人として出ている。同じ蔵宿仲間の権代屋六郎右衛門は東大関で分限の筆頭である。

- (23) 「今石動中町蔵宿十人組請合帳」(千葉家文書の内)は、文政年間蔵宿紅屋平兵衛に對する中町十人組の請合帳で、その後の請人の変更も附箋書してある。なお「蔵宿御格式帳写」。

- (24) 「御郡方蔵宿分限縮証文等扣」(慶応四年辰六月・千葉家文書

の内)は、石動蔵宿が戸出蔵宿から書式を倣したもので、郡方支配たる戸出蔵宿に関するものであるが、根縮証文、皆済帳、借知米・除知米・追御詰米・雑用米願等の書式に精しい。

- (25) 未整理であるが、千葉家には現に十數冊にのぼる印鑑帳が残されている。

- (26) 「蔵宿御格式帳写」

- (27) 享保十六年七月の能登の郡奉行より十村への申渡に見ゆる蔵私相見人に当るとおもわれる。能登では特にこれを置かず村肝煎加役を以て任ずることを許され、その骨折銀(役料米)として蔵宿預り米中より一石に付三厘宛を以て蔵宿より支給する定であった。「加賀藩史料」第六編・享保十六年六月条(郡方古例集)

- (28) 実際の例としては、「戸出史料」に寛保三年閏四月同地蔵宿竹村屋兵三郎の伊勢参宮に際しての不在届がある。なお、「加賀藩史料」第五編所引国事雜鈔・元禄十年七月十日に蔵宿仕る者の親兄弟遠所へ旅行するも、妻子の外は届出するに及ばざるを令している。

- (29) この年頭礼詞はのちに簡易化され書中礼詞でよいとされている。

- (30) 「蔵宿御格式帳写」。蔵宿亭主分を例示すれば次のごとくである。

一 阿弥陀之裏起証文前書之事

私共儀跡々々誓詞被為仰付置候処、今般御改被為成、誓詞被為仰付候御事、

一 御家中御給人様御知行米私共蔵宿仕候ニ付、百姓手前々米納申義御給人様御大身御小身ニ不依、又者百姓之内親子兄弟縁者親類如何様之者ニ而茂依怙愚負不仕、何れ茂一統ニ念を入収納可仕候御事、

一 右御収納米蔵ニ積申刻、米之上中下別々積分不申、一統ニ積合置、持方之砌何レも無替様ニ可仕候、雇申他人之義ハ勿論、親類又者手代ニ而も誓詞不仕者ニ米請取取扱為仕申間敷候御事、

一 預米引負仕間敷候、次ニ為手廻百姓方々納米売払、惡米ニ入替申義ハ不及申上、納米乍有茂惡米ニ振替、御給人様方

ニ相渡申義毛頭仕間敷候御事、

一 納米有之時分、自然火事出来仕所ニ、不焼米ヲ焼失之様ニ仕直シ、米手前江引取申義仕間敷候、有様之躰即時ニ御注進申上、御檢使乞可申候御事、

一 御米納様之義、藏宿肝煎ニ被仰渡之通米制吟味仕、斗之上茂能為盛、毎日藏宿肝煎相廻申節一日切入米高通ニ記相渡、積切候分ハ約繩懸テ藏宿肝煎封請置可申候、尤納米藏之内善惡積分不申、百姓持參仕米次第准ニ積置可申候御事、

一 附、藏宿之内米高多預申者、收納之節無人ニ而も米制等吟味入渡不申候間、預米高ニ相込米納人兼而相極、毛頭收納塵抹無御座様ニ可仕候御事、

一 毎月十日、廿日、晦日町年寄、町肝煎、算用聞。藏宿肝煎罷出、私共收納仕候本帳下帳共見届算用相逐候時分、町年寄等江被為仰渡之趣違背不仕、急度相守可申候御事、

一 藏宿中收納米百姓持參仕候節、其村々出来米ツき次第ニ念を入收納仕可申候、若上田之百姓見付宜米禿候而、他村并今石動町之者ニ馴合、惡米ニ替持參仕候ハ、收納仕間敷候御事、

一 藏宿之義ニ付前々々惣而被仰渡之趣相背申間敷候御事、私共米預り申節、せり落之筋無之様先規ニ被為仰渡置候通、私共金沢町中買之者ニ會通仕、惣而御給人様方ニ銀子取替等宜藏宿之様ニ手立を以申為馴、自然ニ其藏宿名ヲ揚候様

成仕形毛頭不仕、前々預り來候古藏宿等手前子細無ツ分手入等を以セリ落申等之義仕間敷候御事、

右之条々於相背者、自分ハ不及申上ニ、我人親共ニ阿弥陀如來御罰深蒙、無間之底ニ墮在ト、未來永劫浮世更ニ御座有間敷候、仍阿弥陀之裏起証文如件、

年 号 月 日

藏宿
五人判

なお、藏宿には手代、下人の外雇人多数あったが、それらの中には頗る手利きの手代もおったとおもわれ、紅屋平兵衛家の手代西明寺屋伊兵衛のごときはそうした例であるらしくおもわれる。

(31) 右「藏宿御格式帳亨」末尾の覺書、慶応三年五月の記のよし見える。

(32) 紅屋惣左衛門・同平兵衛は代々のうちから若年の頃は町年寄見習、家督とともに町年寄・同肝煎を出した。ことに寛政中の惣左衛門は町政に尽力するところ多く、町奉行より特に賞詞せられるとともに、その家格の相続についても配慮を受けている。

(33) 「藏宿御格式帳亨」

(34) 千葉啓三氏所藏文書。

(35) 「福野村并杉木新町村藏所願ニ付戸出村等願書等之扣」

(36) 「御米預り申御給人様方記録」(享保二十年ヨリ・千葉家文書の内)

(37) 同上

(38) 「福野村并杉木新町村藏所願ニ付戸出村等願書等之扣」

(39) 「御米預り申御給人様方記録」

(40) 同上

石動藏宿の中樞とも見るべき紅屋は宗家惣左衛門の外、伝右衛門・平兵衛三軒ともに藏宿を業としたが、寛政十二年十月の同家由緒帳に拠れば、もと千葉東氏に出て、いつの時代か世に埋れて越中国砺波郡紅屋村に居住したので、為に紅屋を家号とするに至ったという。天正中木舟城下に移住み、紅屋基左衛門と称したが、天正十三年十一月晦日の大地震に退転し、翌十四年二月はじめて芳原村(今石動の前名)に移った。宿名今石動に改称後、初代基左衛門・平兵衛はじめて宗兵衛町の町肝煎に任ぜられた。四代肝煎を重ねたが、万治年中町年寄設置により寛文八年惣左衛門町年寄となり、その後寛政に至るまで町年寄を勤ること七代にわたるといふ。紅屋一類は相互に養子関係で複雑な家系となっているが、また寛政十二年の惣左衛門の母が戸出

蔵宿中条屋与三左衛門娘であるごとく、同じ蔵宿稼業で姻戚関係を保っている。

(41) 表は「御米預り申御給人様方記録」に拠る。

(42) 蔵宿年代表は同上并に「前々預り申御給人様書出帳(天明八年七月改・千葉家文書の内)」に拠る。備考も同じ。

(43) 参考のために石動町蔵入の各村の紅屋平兵衛の記録において判明するものを、「御米預り申給人様方記録」(享保二十年ヨリ)その他をもって掲げておくところである(順序不同)。

五位村 蓮沼村 笹川村 嶋村 殖生村 上次郎嶋村 下次郎嶋村 高島村 上養村 下養村 水落村 淵ヶ谷村 人母村 芹川村 石坂新村 水牧村 平桜村 木舟村 本領八百村 高田嶋村 七社村 小中村 道明村 赤丸村 舞谷村 安楽寺村 須川村 江尻村 和沢村 大滝村 土屋村 畠中村 浅地村 白谷村 岡村 安養寺新村 戸久新村 内御堂村 石堤村 平田村 石名田村 上向田村 下向田村 野寺村 養輪村 後谷村 馬場村 桜町村 荒屋敷村 西明寺村 講田村 松尾村 糠子嶋村 福町村 下後返村 田川村 道林寺村 神嶋村 経田村 砂田村 西中村 鷹栖村 杉谷内村 上野村 中野村 水嶋村 糸丸村 嶺村 清水村 胡麻嶋村 西村 坂又村 開発村 棚田村 谷坪野村 道坪野村 小森谷村 鷺嶋村 四日町村 志歩式歩村 綾子村 松永村 森谷村 長村 小神村 渋江村 下老子村 名畑村 西嶋村 柴田屋村 鳥倉村 栃谷村 千石村 東宮森村 嘉例谷村 栗栖村 中村 高木出村 五郎丸村 柳原村 石王丸村 藤森村 新西嶋村 宇治新村 金屋本江村 金屋本江新村 三日市村 岩屋滝村 茄子嶋村 北市村 内山村 柳川村 福住村 高木村 野端村 菅ヶ原村 下屋敷村 岩嶋村 横谷村 四十万村 小野村

(44) 「福野村并杉本新町村蔵所願ニ付戸出村等願書等之扣」同上

(46) 「明治四年分御收納米并ニ御払方記帳」(千葉家文書の内)

(47) 「前々預り申御給人様書出帳」(天明八年七月)人持・平土の外与力も知行を与えられる。平土総数は藩末で千四百余家ありという。(加能郷土辞彙)。

(49) 金沢米穀取引所沿革

(50) 「御給人様方御知行所村附帳」前田平大夫分には、「御引米百五拾石之分ハ二重俵ニ仕立附送り可申事、尤二重俵ハ石ニ四拾文宛請可申候事」とあり、原頼母分には、「御引米ニ相成候分二重俵出来、代銀石ニ壹匁宛村々八米高ニ割符いたし村方取立可申事」と見える。

(51) 加能郷土辞彙

(52) 「加賀藩史料」第四編・寛文八年七月廿六日条(理應集)

(53) 同上・寛文十三年七月廿六日条(改作所雜留)

(54) 「嘉永七年七月二日改本勘相逐候分扣帳」(千葉家文書の内)なお後掲参照。

(55) 「加賀藩史料」第十一編・享和三年七月十三日条(御算用場旧記)

(56) 「蔵宿御格式帳等」

(57) 同上(貞享元年七月廿八日算用場より今石動町奉行篠嶋豊前への達)

(58) 同上。この延享二年七月の蔵宿御格式帳は藩政時代を通じて蔵宿に対する法規として最も基本的なものであった。本文五三条・書式例六条の五九条から成り詳細をきわめている。

(59) 同上

(60) 同上

(61) 「福野并杉本新町村蔵所願ニ付戸出村等願書等之扣」

(62) 蔵所替貫は、例えば文化元年七月御器屋久左衛門株の油屋十右衛門引渡に際しては四貫文であり、文化三年七月藤田屋久右衛門より今村屋九左衛門への譲渡に際しては三貫五百目で、株譲渡金の外である。

(63) いずれも「前々預り申御給人様書出帳」(天明八年七月改)より例をとる。

(64) 「分蔵之義申来り候節願書等旧記」(蔵宿御格式帳亨に合綴)

(65) 同上

(66) 「蔵宿御格式帳亨」

(67) 「加賀藩史料」第六編・享保十一年八月条(御郡典)

(68) 同上 第十一編・享和二年七月十二日条(御算用場旧記)

(69) 同上 第六編・享保十一年八月条(御郡典)

(70) 「蔵宿御格式帳亨」に収む。

(71) 歩入については「石川県史」第三編・農業(下)

なお、収納に当つての村方方面の制規を窺うべきものとして、例えば「元禄十四年御扶持人十村山廻御用動方帳」(太田文庫)がある。御知行出之事、御蔵入御給人知名附御用、御給人御蔵宿御用等の条目がそれである。

また宝暦八年十月御家中諸給人知行米所々蔵宿納方の義についての算用場達が、同文庫「宝暦八年通達」中にあり、寛文四年の古法(これは各蔵所に懸札されていたもの)、享保九・十一年の達を重ねているが、内容は御蔵入について蔵下敷の手代請負による下敷代の取得、指穴よりの米こほしなどの不正、目払米の賄収・たてり人足の不正等に関してである。

なおまた収納不足米に対し、十村添印を以て藩から村へ下渡される変地御償米・夫喰御貸米、引免御蔵返米を以て補填したことも多かったようである(千葉啓三氏所蔵文書)

(72) 金沢米穀取引所沿革

(73) 「蔵宿御格式帳亨」

(74) 千葉啓三氏所蔵文書

(75) 同上

(76) 同上

(77) 同上

(78) いずれも千葉啓三所蔵文書に拠る。

(79) 「蔵宿御格式帳亨」

(80) 「加賀藩史料」第九編・天明六年正月条(杉木氏小留帳)。しかし一面、「別而心立悪敷者共、無差引成儀を任勝手、法外之

仕方有之旨委細及承候、是以後蔵宿等未進に不限、人手之物を借請致無沙汰候者共は、耻を不存不義至極に候間、以来節義之処異犯有之間鋪候」と棄捐令による風儀の廃顔を戒めているが、とくに蔵宿に対しては、債務者の過法はその保護上むしろ警戒すべきでもあり、藩としては痛しかゆしというところであつたろう。

(81) 同上 第十二編・文化十四年七月条(上田旧記)

(82) 同上 第十四編・天保八年七月六日条(成瀬正敦旧記)

(83) 千葉啓三氏所蔵文書

(84) 同上

(85) 同上

(86) 同上

(87) 同上、それら山証文三通も同時にある。

(88) 同上

(89) 能登輪島町における中島屋三郎右衛門の場合もこの例に当る。その天保十二年、釜屋谷村懸作取高三・二石五斗余を旧持主一九人に譲返さしめられ、しかも同家は蔵宿にして酒屋、質屋を兼ねたというから(輪島町史)、石動蔵宿の場合においても如何ともいいがたい。

〔附記〕 本稿作製にあたり、石動町千葉啓三氏はその所蔵文書の閲覧を快諾され、同地皆月弘行氏は幹旋の勞をとられた。また史学研究室関係学生諸君の協力を得たところがあつた。ならびに篤く御礼申上げる。

—— 未完 ——